

室生朝子

父犀星の俳景



室生朝子

父犀星の俳景

毎日新聞社



父^{ちち}犀^{さい}星^{せい}の俳^{はい}景^{けい}

一九九二年三月五日 印刷
一九九二年三月二〇日 発行

著 者 室 生 朝 子

編集人 深 瀬 正 頼

発行人 戸 田 栄 輔

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇―五二 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島

〒八〇二 北九州市小倉北区紺屋町

〒四五〇 名古屋市中村区名駅

印刷 中央精版
製本 大口製本

万一、落丁・乱丁の本は、小社でおとりかえます

はじめに

犀星は生前に左の四冊の句集を出版している。

『魚眠洞發句集』昭和四年四月武蔵野書院刊

『犀星發句集』昭和十一年六月野田書房刊

『犀星發句集』昭和十八年八月桜井書店刊

『遠野集犀星定本句集』昭和三十四年三月五月書房刊

はじめに

犀星は小学校を終えると、金沢の裁判所の給仕となって働いた。その上司から俳句の手ほどきをうけ、金沢の地元紙の北国新聞、政教新聞（のちの北陸新聞）に、投稿を始める。そして明治三十七年十月八日の北国新聞に、俳句が入選する。犀星十五歳の秋、「照文」の署名であ

った。ちなみに「犀星」のペンネームがはじめて用いられたのは、明治三十九年三月三日の政教新聞の入選詩である。

水 郭 の 一 林 紅 し 夕 紅 葉

その後、明治四十三年まで投稿時代はつづく。撰に採られた俳句五百六十句、のちに句集を編むときに収録した句は、五句ほどである。

私は昭和五十二年に、そのときすでに調査して拾った俳句をすべて収めて『室生犀星句集魚眠洞全句』を出版した。

今後書簡集を編集すれば、さらに何句か見出すことができると思う。犀星はこまめな人であったから、頂戴物をする^とと御礼の葉書、手紙に一句を添えて書いていた。旧作とある句もあるが、あらたに作句したものもある。

犀星の一生の作句千七百四十七句のなかから、私は私自身に馴染みの深いもの、その一句から犀星の想い出に素直につづくものを拾いあげた。従って俳句のうまさ、面白さと私は無関心に仕事をすすめた。忘れかけていたようなことも、あらたに思い出し、思いがけず楽しく

原稿が書けた。あえて投句のなかから拾ったのは、それぞれの句が私の心を動かしたからである。

私は子供の頃に俳句を作っただけで、難しい約束事には詳しくない。『室生犀星句集魚眠洞全句』に、若干の誤りを発見したので、『犀星発句集』桜井書店版を底本とし、投句のみその初出を記した。桜井書店版は犀星自身の編集であるから、四季の区分をそれによった。また、日記や書簡などから拾ったものは、『室生犀星句集魚眠洞全句』から選んだ。

犀星作品の引用文については、若い読者のことを考え、新字、新仮名づかいに改めた。また、事実の誤りもそのままにした。俳句は、新字、旧仮名づかいにした。

室生朝子

目次

はじめに	1
新年の句	9
春の句	19
夏の句	89
秋の句	163
冬の句	201
あとがき	235

装画 生井 蔵
装幀 中島かほる

父犀星の俳景

新年の句

雑煮

何の菜のつぼみなるらん雑煮汁

ふるさと金沢のお雑煮は、かつおぶしと昆布のだしで、切り餅は焼かずにそのまま煮る。
小松菜かほうれん草を最後にいれる。いろいろの野菜をつかわずに単純なお餅の味だけのお雑煮である。

今でこそ菜の花の蕾は売っているが、戦前にはあっただろうか、それとも一把わの小松菜の中に早くのびた蕾が一本だけあったのを母は犀星のお椀に入れたのかもしれない。昔はパセリ、防風ぼうふう、芹せり、三つ葉などは、高級野菜にはいり、デパートの野菜売場にしかなかったものである。

私は十年ほど年賀状に同じ祝い言葉を印刷していたが、今年はふと思いたち、冒頭のこの句を私自身の筆で印刷して年賀状とした。犀星の新年の句は、やはり郷愁の心の表われだろうか。雪、山、などをよんだものが多い。

私はこの句からあらたな年に対しての、やさしさのようなものを感じていた。女性が好きになる生活のひと齣ひとまの句だからであろう。

鍬初の雪割草や鉢にあぐ

年が明けてはじめて鍬くわを使って少年犀星は、何をするために土を掘ったのだろうか。と、思いがけず芽が出はじめたばかりの小さいひと株の草が、鍬の先にひっかかってきた。春はまだ遠い、雪のある冷たい土の中で、たとえ五分でも芽生えている、小さな草花を犀星はいとおしく思った。そのままその辺りに植えることは気がすまなかった。犀星は本堂の裏側の床の下から、小さい植木鉢をとり出して、土を柔らかくほぐしてそっと植えこんだ。そして植木鉢を縁側の隅に置いた。赤井ハツ（養母）が珍しく、

「照ちゃん（犀星の本名は照道ていどう）、それ、なあに、花が咲くの」と聞いた。犀星は、

「これはきつと雪割草だと思う。白い小さな花が咲きますよ」と答えた。日頃、ただこわいと思っている赤井ハツが、小さいひと鉢に興味を示してくれ

たことが、嬉しかった。

縁側は一日のうちに日の当る所が、右から左へと少しずつ動いていく。犀星が気がつく、ハッがいつの間にか、植木鉢を日の当っている場所まで、動かしてしてくれたのである。

私は妙高高原の関川の石ころの多い、川原を歩いていた。雪だけで川の水は多い。石と石との間に、白っぽい塊が目にはいった。ちかよってみると、雪割草の群落であった。雪割草は葉は横にのびギザギザの多い柔らかい手ざわりである。葉の中央から細い茎がのびて、小さい五弁の白い花が咲く。花の丈は十センチ弱である。名前のように雪の中から芽を出すほど、強い花、そして山では春一番早く開く野草である。

〈投書〉明治四十一年一月十七日「北陸新聞」